

そのうち艦は直撃弾を受け沈没のおそれありと見て退艦を命ずる。海に飛び込み岸を目指して泳ぐ兵士に向かって敵機が機銃掃射を浴びせて来る。敵機の飛来方向を見ながら、敵機が近づくと海中へ潜る。銃弾が水中を飛び交う中、どうにか陸にたどり着くことが出来た。着のみ着のままのぬれ姿で久里浜の学校へと向った。見渡す限り街は焼土と化し見る影もない光景となっていた。

八月十五日ついに終戦となったのです。空襲で破壊された兵舎の片付けや残務整理等を行い、十月下旬に故郷に帰ることができた。

戦いに破れても群馬県の郷里、水上の山野は以前と変わりなく私を迎えてくれた。以後六十数年、祖国日本は再建され、平和な日本に生まれ変わって今日に至っている。この平和日本を恒久に保つてもらいたいと戦争の惨さを知らない世代の方々に祈るのみです。

私の海軍生活二カ年

―海上護衛戦記、その生と死―

京都府 鶴原 甫

私は昭和三（一九二八）年九月生まれで、高等科一年生のときに米英らとの戦いが始まり、後日考えると、まだ良き時代だったとはいえ、就職も自由にならない社会情勢の時代でした。それで周囲の人のすすめもあり、昭和十七年十一月二十三日、海軍を志願して受験し、その場で合格が決まり、翌十八年二月十三日の土曜日、帰宅すると役場より、七月一日、舞鶴海兵団に入団の採用通知が届けられていました。

昭和十八年三月二十七日に高等科二年を修了、入団までの三カ月間、家の手伝いと、発足したばかりの興亜青年学校に学び、六月三十日、多くの人の歓呼に送られて村を離れ、正式には七月五日、舞鶴海兵団長の「海軍二等水兵を命ず」で、昭和

生まれで、童顔の軍人が誕生し、泣く子も黙るといわれる猛訓練がはじまりました。

入団してまもなく、私たちは「海軍練習兵」という特別組織であることを知らされました。この制度は、十四、五歳の志願兵の中から選り、将来海軍の基幹となる軍人の養成を目的として、昭和十七年九月に第一期生が入団、私たちは第二期生で舞鶴管内で五百人だったそうです。

そのため、道路をはさんで右側にあつた東兵舎に居住し、分隊長は兵学校卒と珍しく、以下教官・教班長ら優秀な人が選ばれ、新兵期間は一般が三、五カ月に対し一年間と云われました。

最も大きな特色は、国語・数学・歴史・地理・物理・化学・英語等の普通学を、短期間に学んだ事でした。そのため各専門の教官・教員が配置されてきました。

毎日が軍事・普通両学の講義と、実地訓練の繰り返しでしたが、一等兵に進級すると外出も許可され、市内に各教班ごとに、一般家庭との契約に

よる休憩所というべきものが用意されていました。

また、水泳・銃剣術・相撲・カッター・登山等の競技大会があり、松尾寺、舞鶴城跡等の行軍、共に三日間の由良川尻の幕営訓練、長田野演習所における陸戦訓練も、思い出の一齣です。

しかし、新兵教育期間が長いということは、不利な面として、海軍伝統といわれた罰直は、一段と厳しく多かつたのだと思います。特に子供に等しい年齢だった故にこれは思いがけない地獄でした。

一カ年の予定は、戦局の切迫によって十カ月に短縮され、昭和十九年五月に全教程を修了、舞鶴海兵団に別れを告げ、各々専門教育を受けるため、各学校へと別れ別れとなりました。

私は横須賀市久里浜にあつた、海軍対潜学校に入學しました。ここは機雷術と水測術に大別されましたが、そのほとんどは軍の極秘扱いで、教科書やノート等の取扱も厳しく、卒業後も、学んだ

ことを書いたノート等の自由な所持は一切許されませんでした。頭の中に入れるだけだったのです。

四カ月の教育を終わり、普通科の特技章を左腕につけて九月九日退校、舞鎮管下の全員は舞鶴防備隊（海上保学校）に入りました。ここでの思い出は、舞鶴湾入口に設置されていた、防潜網の交換作業を実施したことです。

昭和十九年十一月十六日、「第六十九号海防艦」
艦装員として、神戸の三菱造船所に入りました。

艦装員とは、建造中の艦が竣工後、その乗組員となる予定者で、就役に備えて諸準備をする任務でしたが、宿舎と造船現場を往復するぐらいでした。

まだ爆撃もなく、物資の配給も優遇され、市民感情も特に良く、上官の配慮か外出も比較的自由で、海軍生活で最も恵まれた期間でした。

（海防艦とは、海上輸送の護衛艦としての必要から急速建造された艦種で、対潜水兵装は特に強化され、私らの型は七四五トン、乗組員百八十人前後、就役したもの百七十隻、うち沈没七十四隻、

損傷約三十隻でした）

第六十九号艦は、十一月二十八日進水、試運転も良好で、十二月二十日に引き渡しがあり、初めて軍艦旗が掲揚され、二十二日呉軍港に投錨しました。湾内には巨大な「大和」や、大小艦艇を左右に見ましたが、我が艦の小さいことが、それほど気にならなかったのは、年齢、経験共に浅かった故でしょうか。

ここで電測関係等を整備し、大分県佐伯に三十日に入港しました。この佐伯に防備隊があり、更に対潜訓練隊がおかれ、新造の海防艦は、ここで訓練を受けることになっていたのでした。

年代は昭和二十年と変わり、正月二日の朝からあの有名な伝統の、「月月火水木金金」の訓練が始まりました。早朝から日没、ときには深夜まで、九州とはいえ吹雪舞う艦上で、ときには港外に出て戦闘食を取りながら、あらゆる場面を想定しての訓練が続けられ、「戦闘即応」、「見敵必殺」の自信と態勢ができました。

三十日に訓練は終了、艦は再び呉に入港して弾薬・食糧・水等を積み、二月三日、門司に入港。

初の出撃に貯金通帳等を家に送り、久しぶりに陸上の風呂で垢を落とし、健闘を誓って盃を交わしました。

二月五日早朝、「出港用意！」の号令が飛び、初陣に緊張しながら岸壁を離れ、陸上や在泊艦船の見送りを受けながら、次第に速度を早め、湾外で護衛艦二隻と船舶五隻で船団を編成、香港に向かいました。

二月の玄界灘は狂い、小さな本艦らは木の葉のごとく翻弄されながら、朝鮮半島を右に見、黄海を横切って支那大陸に接近しながら南下を続け、二月十一日には無事香港に入港することが出来、盃をあげることができました。

二月十四日、護衛艦二隻が出港、海南島近くで防暑假に着替え、仏印サンジャック付近で二隻の船舶と合流、静かな南方の海を滑るがごとく南下し、二月二十三日にはシンガポールに無傷で投錨

の喜びをかみしめることができました。

初めて南国の土を踏みましたが、停泊中の艦はその暑さに苦しめられました。

二月二十七日、護衛艦三隻と油槽船二隻で内地に向かいました。

途中任務の変更があり、本艦は同行となったのですが、三月四日早朝の三時三十分ごろ、水測が潜水艦を探知、総員配置について息詰まる緊張の中で、航空燃料を積んだ「パレンバン丸」に魚雷命中、一瞬にして全船炎に包まれ、乗組員が火だるまになって、油の広がる海に飛び込み、そのまま没するという戦場ながらの無情な様子を見ました。その後、爆雷投射しましたが戦果は確認できず。三人を救助しただけで終わりました。

翌五日午前十時過ぎ、視界不良の中で「良栄丸」が魚雷により沈没しました。重油のためか飛火しなかったので、三十人近くを救助しましたが、厳しい現実を体験しつつ、護衛艦三隻は海南島榆林に入港しました。

三月八日二隻で一隻を護衛して出港しましたが、その夕方、雲の隙間より落とした敵機の爆弾が、本第六十九号艦の中央部に命中、機械室とその前後の一部は、海中に没して航行不能となり、二十一人が戦死し負傷者も多く出ました。

その後、曳航されて島陰で補強し、二隻の海防艦の応援で、曳航されて香港に向かったのですが、時化のために大破している本艦はこれに耐えられず、三月十六日の朝六時ごろ、真つ二つに折れて海中に没し、三十一人の乗員が艦と運命を共にしました。

私は何とか脱出して救助され、約九十人の艦の乗組員と共に夕方、悄然と重い足取りながら香港の土を踏みました。

(終戦後、当時の戦況を調べて見ますと、昭和二十年一月、米国の機動部隊は、南シナ海方面の日本の船舶を徹底的に攻撃、このため一月中に百隻以上の船舶が沈み、海上輸送は致命的な打撃を受けたのです。私たちも、そのような被害の一部

を目にしながら南下したのですが、本艦らがほとんど、その危険を知らずに南下できたことは、正に天佑であり、奇跡に近いことでした)

復路、無事に帰国することも至難のことであり、私らの船団の後から、最終の十六隻の船団が編成され、三月十九日にシンガポールを出港したのですが全滅。これで南方との輸送路は絶たれたのです。

ところが前述の二隻が帰国することになり、救助された我々第六十九号艦の乗組員は半数に分かれて、三月十七日夕方に便乗し、翌未明に出港、途中危険を感じることもなく、二十七日に門司に帰投の幸運に恵まれました。

門司から舞鶴海兵団に入り、ここで補充員として待機、昭和二十年五月三日に、今度は、第六十号海防艦艦装員となり、兵庫県相生市の播磨造船所に転勤になりました。

ここでの生活は、市内も造船所も貧弱で不便、食糧も不足し、軍規も地方に分散していることを

考慮すると、融通のきかない厳しいもので、神戸の生活とは大きな差がありました。

技術的なものか、材料の不足等が原因かは不明ですが、第六十号海防艦は試運転等を重ねても性能が不良で、長い艀装員生活をしているうちに八月十五日を迎えました。

当時、日本各地への米軍の爆撃が激しくなり、対潜訓練隊は佐伯から石川県七尾に移転し、新造艦は日本海に入る必要がありました。しかし、関門海峡の米空軍の投下・敷設した機雷と、米潜水艦も入っていた日本海を、訓練していない艦が突破することの可否を考える時、艦の機能欠陥による遅れは全乗組員にとっては大きな幸せだったと考えられます。

私は長男であったため、第一回目の復員者となり、昭和二十年八月二十八日に艦を去りました。別れを告げる艦長の声が震え、涙の中でかわす別れの盃で、私の二年二カ月の海軍生活は終わりました。

「昭和の白虎隊」ともいわれた海軍練習兵（特別年少兵）ですが、海軍部内でも、このような制度があったことを知る人は少ないとのこと。

一期生の三千二百人のうち約二千人が、二期生の三千七百人のうち約千二百人が、各々少年の身で国家のために殉じました。

現在の高校一年生の、秋以降に相当する若さです。そのことを思う時、哀れさに、遣り切れない気持ちになります。今の網野町出身の練習兵は六人、うち二人が戦死しています。

生存者の有志によって、東京の東郷神社境内に、昭和四十五年五月、時の皇后陛下の御歌を頂いた、慰霊碑が建立されました。今は永久の冥福を祈るだけです。